

第1回 高校生のための

アートライター大賞

ART WRITER AWARD
for High School Students

アート、はばたけ。
君の言葉で —

賞 大賞3名 優秀賞20名
入賞者には賞状と副賞が贈られます。

選考委員 穴澤秀隆 (美術教育専門誌「美育文化」編集長)
今橋映子 (東京大学大学院総合文化研究科助教授)
押金純士 (月刊『BT/美術手帖』編集長)
藤本陽子 (茨城県近代美術館企画課長)
五十殿利治 (筑波大学大学院人間総合科学研究科教授)

締め切り 2005年9月12日 (月)

アートのすばらしさを広く人々に伝える文章を、A・B・Cいずれかの内容で、あなた自身の体験にもとづいて書いてください。

- A 制作体験 自分がつくったアート作品について、そのアイデアやプロセス、意識などについて、感じたことや考えたことを書きます。
- B 作品探究 自分が実際に見たアート作品について、できる限り詳しく観察し、関連情報を調べ、深く味わい、感じたことや考えたことを書きます。
- C 芸術支援体験 自分の参加した美術の授業、アートプロジェクトやボランティア活動、アートに関する調査などの体験をもとに、感じたことや考えたことを書きます。

■裏面に詳しい応募規定があります。

主催 筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術学専攻

style.TSUKUBA

芸術の魂つづから 芸術30周年記念事業

第1回高校生のためのアートライター大賞 選考結果

2005年12月1日

第1回高校生のためのアートライター大賞選考委員会
筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術学専攻

応募総数 171編中

大賞 (3名)

白崎 藍 「心」	福井 高志高等学校
田邊萌陶乃 『盲目の人々』	岡山 総社南高等学校
繁昌茉音 見過ごしたモノは何ですか	群馬 共愛学園高等学校

特別賞 (1名)

島田奈名子 デザインはドーピング	島根 益田高等学校
------------------	-----------

優秀賞 (24名)

浅田泰宏 始まった僕のCG生活	大阪 同志社香里高等学校
五十嵐佑太 生命の表現法	宮城 宮城野高等学校
大久保美貴 作品と私	茨城 取手松陽高等学校
岡田美知 明日の神々の歌	広島 基町高等学校
小川美代子 もっと飲み込まれてしまえばいい	千葉 匠瑳高等学校
菅 千尋 伝えること-人と人の繋がり-	千葉 市原中央高等学校
菊池さくら 挿し絵と文字	北海道 札幌平岸高等学校
木下愛理 変化ノチ進化	三重 皇學館高等学校
栗原優香 ハンス・ベルメールの人形作品に見る「芸術性」と「玩具性」	宮城 宮城野高等学校
栗棟美里 ネオン管に見たもの	大阪 大阪成蹊女子高等学校
小松明日香 パレットの中の仏教美術色	北海道 札幌平岸高等学校
塩谷美香 創造と破壊	富山 高岡第一高等学校
白方はるか 宮崎駿は<千と千尋の神隠し>を通して私たちに何を伝えたかったのか	埼玉 大宮光陵高等学校
菅原彩木 大正を駆け抜けて	北海道 札幌平岸高等学校
関谷ちひろ コピーはアートなのか	北海道 札幌平岸高等学校
善名朝子 人と人をつなぐ3面の壁画	神奈川 相模女子大高等部
谷口絵美 ひとりじゃない! 『MUSEUM』	北海道 立命館慶祥高等学校
堂坂奈未 箱の向こうの「言葉」	北海道 札幌平岸高等学校
日吉ちひろ 「爆発」ということ。	東京 大泉桜高等学校
平谷直輝 これからの美術館	東京 筑波大学附属駒場高等学校
日角有希 『モナ・リザ』と私	北海道 立命館慶祥高等学校
堀口紗弓 アートのチカラ	東京 吉祥女子高等学校
三上香織 土で描く	東京 戸山高等学校
三宅 光 あの空を見上げれば…	岡山 総社南高等学校

学校賞 (7校)

北海道 札幌平岸高等学校
北海道 立命館慶祥高等学校
埼玉 大宮光陵高等学校
東京 筑波大附属駒場高等学校
富山 高岡第一高等学校
三重 皇學館高等学校
岡山 総社南高等学校

「心」

福井県立高志高等学校 白崎 藍

絵を描いていて、不思議な感覚に襲われることはないだろうか。自分ではなく、手の方が絵を描いていて、その手は自分でない何か別の意志が動かしている、というような。

その時、何を考えているのかといえば、全く別のことを考えている。例えば天気のことだったり、友達とつい先程交わした会話だったり、ずっと以前の記憶だったりする。

そして、そんな時はいつも、私の中で様々な気持ちが渦まいている。何と説明すればいいのか分からない。だが、決まってそれは、何かを叫ぶような激しい感情である。

それが重なって、この絵ができた。

勿論、最初にそれなりの構想はあった。

新しく水張りをして思ったことは、「自画像を描こう」ということだった。特に意図があったわけではない。よくある手頃なテーマだと思っただけであった。それから、ラフスケッチをしながら、自分の姿と共に「生命」というものを表現しよう、と思いついた。絵の中で、私を取り囲むものは「生命」の象徴であった。右上から溶け落ちるものは花の蜜、左上の緑色の物体は魚の鱗をイメージしたものである。左右で動物と植物を表現し、その下に雫や流水紋、泡の模様を描くことで、生命の根源である水を表現する。そして、それらのモチーフを暗闇の中に浮かびあがらせることで「生命と自分」というテーマを表すつもりであった。

この当初の構想は、途中まで忠実に実行された。私は、絵ができあがったら「生命」という題名を付けるつもりでいた。

背景を黒で塗り、自分の姿を鏡で見ながら描いていく。しかし、顔を描くことがなかなかうまくできなかった。自分の特徴をつかめず、何度も何度も塗り直した。

そうして描いていくうち、ふと思い出したことがあった。ずっと前の嫌な記憶である。小学校の五年生の時だった。クラス内でいじめがあった。いじめられた子は毎日殴られ、囲まれて物をぶつけられ、何もしていないのに笑われ、罵声を浴びせられた。誰も、その子とは口をきかなかった。

その子とは、私のことであった。

最初は、何を言われても言い返した。しかし、何ヶ月か経つうちに何も言わないようになっていった。人から軽蔑されていることが、心からこたえた。「私はすごいんだよ、お前たちとは違うんだ」と言えることが、何かひとつでも欲しいと思った。

デッサンの基礎すら知らなかった私は、姉の漫画を持ち出してはその絵を写した。姉に見せると、「下手くそ」と言われた。泣きながら、「上手だ」と姉が言うまで描き直した。

その後、一年ほどして絵が少し上達した頃、何もなかったようにいじめも止んだ。

今になって考えてみれば、あの時のみじめな思いが、今の私につながっている。

そう思ったら、下塗りだけ施した極彩色のモチーフが、「生命」ではなく「自分の生」に見えてきた。その中心には、きちんとこちらを見据えてくる、私がいるではないか。

私が本当に描きたかったのはこれだったのだ、と思った。「生命」などというのは後からつけたテーマである。私は元々、「自画像を描きたい」と思っていたのだ。

私は結局、花や雫や鱗などのイメージを残した。変える必要がないと思ったのである。形を変えなくとも、描くときの心が変われば別のものになるのだと思った。

手が自然と動いた。

最初、黄色にするつもりだった蜜には、大量に赤が入った。全部をとろとろと流すつもりだったのに、できしてみると蜜のモチーフは赤くなるにつれて質感が固まっていった。タッチが激しくなり、線のうねりは大きくなった。固いはずだった魚の鱗は、いつのまにか半固体のような質感になった。そこから落ちる雫は、光を放つようになった。そして、泡の模様は上昇していくさまを感じながらゆっくりと描いていった。

溶け落ち、くい止めようとし、渦まき、滴り、流れ、また上昇する。

すべて、内面から吹き出す感情を筆にぶつけたものだ。特にねらいも意図もない。私の心の姿を描いた、内面の自画像である。

具体的にどんな感情かと尋ねられれば、言葉に詰まる。説明できるものなら、私は言葉にしようだろう。しかし、この気持を表せる言葉がどうしても見つからない。言葉にならないから、絵にして表すのである。

ただ、自分の中で渦まく心に、描いている間だけ触れていたように思うのだ。

完成した絵を眺めたとき、絵の中の自分と目が合った。絵が叫んでいる、と思った。私はここにいるんだ、と言っているような気がした。ああ、私は生きているんだ、と思った。

私は、この絵に「心」という題名をつけた。

『盲目の人々』

岡山県立総社南高等学校 田邊 萌陶乃

美術の授業の中で、ソフィ・カル（1953年～）の作品『盲目の人々』について話し合う機会がありました。授業は「生まれながらに目の見えない人にとって美とは何か」ということを想像することから始まりました。「視覚だけでなく、聴覚や触覚で感じる美がある」、「美は自分にとって心地良いものすべて」、「美は想像力で感じる」といった意見の中で、次第に話し合いの論点は「盲目の人にとって美とは何か」と問いかけること自体の是非に移っていききました。

その時まですっかり忘れていましたが、私はその作品を数ヶ月前に見ていたのです。丸亀市猪熊弦一郎現代美術館で『風景遊歩』と題した展覧会がありました。独自のまなざしによって発見された‘あたらしい風景’や、作家の深層を照らし出す‘内なる風景’など、風景の多様性を提示するという試みのものでした。カル作品は、その中の《見えない風景》というセクションに展示されていました。この『盲目の人々』という作品は生まれながらに目の見えない人たちのポートレート写真と、「これまでに見た一番美しいものは何か」というカルの問いに対する彼らの言葉、そしてその言葉からカルがイメージして作ったオブジェという3つのもので構成されています。私にはそのポートレートもオブジェも、ただただ憂いに満ちたものに映り、作者の意図する意味に気づくことはありませんでした。しかし、授業で偶然にも作品に再会し、クラスでの話し合いの中で私はもう一度彼女の作品について考えるチャンスをもらったのです。

話し合いの最初の段階では、「問いかけ自体が相手を傷つけるものではないか」、「失礼だ」という意見が大半でした。確かに、目の見える私たちの前にあるものだけが可視の世界であり、そこにのみ‘美’というものがあるのだとすれば、全く不条理な質問ともいえます。常識的には強者の奢りのなせる残酷な仕打ちとすら思われるかもしれません。しかしカルは何人もの盲目の人々にこの問いかけを続けたのです。そして、私たちはその素直で無垢な答えに驚かされてしまうのです。

「私がこれまでに見た一番美しいものは遠ざかっていって遂には見えなくなってしまう海です」

と言う男性。彼の目の前には一面の海が広がっています。遙か彼方の水平線の向こうまでしっかりと映っています。

「緑色ってきれい。だって僕が好きになるものは、いつでも緑色をしているんだって。草は緑色、木の葉っぱも自然も……。緑の服を着るのも好き。」

と答える子供。彼の世界には色彩が満ちています。そして一番好きな緑色にあふれています。

私たちに見える世界がすべてではなかったのです。気がつけば、目の見える私たちの前にだけ‘美’は現れると思いきや、心の中にあったこの先入観こそが相手を傷つけるものであり、失礼なことだったのではないのでしょうか。考えてみればごく当然のこの事実を、私は今まで想像したことがありませんでした。彼に見える海と私に見える海はどう違うのだろう。この子供に見える緑色と私の感じる緑色は同じ美しさだろうか。

それぞれが見ているものをお互いに確認することは、現実にはできないことかもしれません。しかし、カルは互いの見える世界の少しでも多くの部分を共有したいと精一杯の想像力をふくらませます。カルと盲目の人々との対話は何枚かの写真となって、私たちの目の前に示されました。その写真が、カルの出した答えです。その答えが正しいのか間違っているのかを確かめることは誰にもできません。けれども、カルは私たちにも呼びかけているはずで、私たちも考えなくてはならないのです。優しくも弱い立場であるが故に、いつもかき消されそうになる彼らの言葉に耳を傾けなければなりません。そして、お互いの持つそれぞれの美しい世界を感じあい、歩み寄ることができればどんなに幸せなことでしょう。

美術作品とは「真の経験の不完全な代役でしかない」と言われます。完全に共有できることは決してないやせなさを感じながらも苦悶し、彼らの見ているものに思いを馳せることは、美術作品の壁を乗り越えようとする行為です。現実とは違う代役の中に、少しでも真実を見つけ出そうとすることに美術の真の意味があるのではないかとカルは訴えているような気がします。

今、カル作品『盲目の人々』のポートレイトを見返してみると、その表情には現実世界をしっかりと見抜く自信や、今ここに生きている喜びが満ちあふれているようにも思えてきます。そして、確かに存在する‘美’が彼らの視線の先にあることが分かります。見過ごさなければ、それはすべての人の前に存在するはずで、誰かが気づけば、きっと他の誰かに伝わります。この作品は、‘美’を共有する喜び、今までまったく気づかなかった彼らの表情の透き通るような美しさをも私に発見させてくれたのです。

参考資料：アメリカ・アレナス『なぜ、これがアートなの』淡交社 より引用と図版

ソフィ・カル『本当の話』平凡社 より引用

広島市現代美術館「パサージュ：フランスの新しい美術展」図録より図版

見過ごしたモノは何ですか

群馬県共愛学園高等学校 繁昌 茉音

「はじめの一步」この言葉にあるように、何を始めるにも最初が肝心である。道が創り出される時。新たな世界に踏み出す時。私達は全て足から始めている。手で探りながらも、足が動かなければ始まったとは言えないのだ。赤ちゃんがハイハイではなく二足歩行を始めた時、彼らにとって大きな変わり目となる。なぜなら、世界が変わるからだ。この「はじめの一步」も同様に世界を変えるキッカケであろう。だからこそ勇気を必要とし、大切にされている。私がこのことを本当の意味で理解したはじめの一步。それが「足跡パフォーマンス」である。

暑い夏が過ぎ、時々冷たい風を感じるようになった。それでも、残暑の残る群馬。10月1日、2日。この2日間は特に日が照っていた。共愛学園では毎年10月の第一の土日にバザーを開催している。通称「共愛バザー」、他校の文化祭に近いものである。この2日間、美術部は夏から企画していた「足跡パフォーマンス」を実際に行った。夏休みの合宿から持ち上がった案は、私たちに予想以上のものを与えることとなった。走ってほしい。これが起点であり企画の中心に置いた課題でもある。アートを感じてほしい知ってほしい。今思えばそんな思いが先走っていたようだった。どうすれば伝わるのか、その事を何回繰り返したのだろう。しかし、その思いも準備していく過程で様々に変化した。楽しませるより先に楽しむ。この事を感じ出したのだ。

当日を迎えるため現地での準備を始めた時、広いと感じていたキャンパスが小さく思えた。仕切りのない野外。それだけでこんなにも変わってしまう。普段は意識しない視野がそこにあった。遮るものがないことが物事を小さく感じさせているようだった。ビニールシートを敷き、布を広げる。素足が一番最初に感じたのはシートや布越しの、土の温かさ。眠気を誘った。誰かがつぶやいた。『土って温かいんだ。』と。小さく感じたキャンパスはやはり大きく、大の字になって見た空は果てしなく広がった。真っ青な空と白いキャンパス。準備を再開するまで各々が何を思ったのだろう。ポーと自分の世界に浸っていたのかもしれない。この一時は予想外の出来事になった。

戸惑い顔。当日真っ白いキャンパスに最初の足跡をつけた男の子の表情である。参加してくれた皆が最初は戸惑い顔だった。その中でも最初の最初。いいのかなどか、ととても迷っていたように見えた。勇気を出していたのかもしれない。不安や緊張で一杯だったかもしれない。小さな男の子はその一步を力一杯踏みしめていた。恐る恐る近付き踏み入れたのは、お爺ちゃんの手引かれてやって来た小さな女の子。アイコンタクトをとりながら、片足をパレットにつける。迷いながらも小さな足跡を残し始めた。違う色に変えるときは足を洗っ

てから。ただ一つあるルールを守りながら、段々と顔色を変えていく姿は印象的だった。少し年代が上がればその変化はまた違う。汚れる事を意識してか皆始めは遠慮しがちだが、覚悟を決めるとその変化は探り探りではなく弾けるかのよう。靴も靴下も脱ぎ捨てた素足が水の冷たさ、石の痛さに反応して声を上げていく。足っていつも守られているんだと痛感した。感触を味わう、何かを感じ取ろうとするかのように踏み出した一步をじっくり眺めていた。色の違い。足の汚れ具合。足跡の形。友人と語り、新たな表現を次々と広げていく。大人の手で作る赤ちゃんの足跡。飛んだり走ったり。小さな子供の足跡もいつも間にか表れていた。手って動かさずには居られないようだ。周りで見守っていたお母さんやお爺ちゃん、興味半分で覗きにきたお婆ちゃん達。そこには笑顔があった。私達スタッフにも笑顔が溢れていた。真っ青な空の下で笑顔に包まれる。これがこれほど幸せなものだとは知らなかった。後半、手の空いたスタッフからキャンバスに飛び込んだ。この気持ちを何かに表したかったのかもしれない。周囲に飛んでいたシャボン玉がキラキラ光っていた。全てが終わった時、やはり笑顔だった。それがまたとてつもなく嬉しさを倍増させていく。

ところで、美術の授業中に偶然クリスト-現代アーティスト-について触れる機会があった。彼の作品は、意味不明、理解不能。これが最初の印象であり、私の感想である。しかし今回同じ参加型パフォーマンスを企画し行ったことで、少しだけ見方が変わった。風景に溶け込んだものは見逃がし易い。彼は包む事で「何事だ」と意識して見るキッカケを造っている。私達を支え動かす「足」。あまりにも当たり前すぎて、私たちはそう意識していない。大切なモノのはずなのに、忘れてしまう事だってある。彼も私もこの事を誰かに気付いてほしいのかもしれない。「走ってほしい」から始まった企画は私に考える種を落として行った。「誰かに楽しんで貰うためには、まず自分が楽しんでいなければできない」これが、最初に出た私の苗である。

デザインはドーピング

島根県益田高等学校 島田 奈名子

私が3年間在籍していた部は、男女ともにとっても仲が良く、毎日和気藹々としていた。各々、自分の目標に向かってまっしぐらに汗水垂らしていた。

しかし、オフシーズンに急にそれはやってきた。

私達の集中力が切れてしまったのだ。やる気がないわけでもなく、部活を休むわけでもない。毎日ダラダラと練習しているだけだった。何か足りなかった。専門的な顧問がいないせいなのか、来シーズンまで大会がないからなのか、理由はわからないが以前とは何か変わってしまった。

何度もミーティングを開いて話し合ったがどれもあまりいい案は出なかった。そして、ある日、お揃いのTシャツを作ることでこの状況を打開しようという発案が生まれた。

デザイン、色、形。何から何まで全て自分達で決めた。発注したTシャツが届き、それに袖を通した時から、不思議なことに私達は変わった。母校の名前と、皆で思案して決めたキャッチフレーズ入りのオリジナルのお揃いのTシャツを着ただけで、私達にはけじめが生まれ、バラバラになっていた部員の心を一つにしてくれた。

私は「ラスト・サムライ」為末大に憧れ、彼と同じ種目を専門にしている。400メートルハードル。同じにしたのはいいが、始めた頃の私にはハードルの全てが怖かった。当たって倒すのではない、歩数が合わなくて逆足で跳んでしまうのではない、そして、何より、最後まで走りきれぬだろうか。大会前、悪い想像をしない時はなかった。

その恐怖はどこからきているのだろうか。答えはわかっていた。私が跳ばなくてはいけない、あの白と黒のストライプの入ったハードルだ。

それなら、ハードルの柄を変えてみたら、という考えが起こった。「白と黒」という定番の柄だから脅威に感じるのだ。例えば花柄にしてみてもどうだろう。これなら当たっても全然痛そうに感じない。子供の頃、花を摘んで走り回っていた時のように楽しく跳べそうだ。では、ヒョウ柄にしてみてもどうだろう。76.2cmの高さのハードルを倒すどころか誰よりも早く跳べそうだ。

柄がダメなら、色だけでも変えてもいい。色彩の心理に関して調べたところ、黄色が一番軽くみえる色らしい。黄色いハードルを跳び越える姿を想像しただけで、重力を感じさせない、月面での競技会を思い描くことができる。

デザインや色、柄一つで人は強くも弱くもなる。白地に水色の母校名と「以心伝心」のロゴ入りのTシャツ。シンプルだが、基調となる白色はスポーツ意欲を駆り立て、青春とフレッシュなイメージを与えてくれる色だ。また、単色調和によって、水色の「以心伝心」の文

字をますます冴えて見せてくれる。当時はこんな色彩学など知りもしなかったが、私達の直感は当たっていたことになる。

私は強くなることができた。皆で作ったお揃いのTシャツは私の精神の糧となり、それを着て臨んだ400メートルハードルの競技で大会新記録で優勝することができた。いつもの私なら悪いことばかり考えて積極的に走ることはできなかつただろう。しかし、あのTシャツを着たお陰で、私には自信が生まれ全てのモヤモヤが吹っ切れた。

デザイン、色は、精神のドーピングだったのだ。選手の現役時代に色彩学を学んでおけば、もっと効果的な練習メニューが出来ていただろう。ウォーミングアップの時には暖色系のトレーナーを着て早く体感温度を上昇させ、パート別練習の時には時間の経過を短く感じさせる寒色系のTシャツに着替える、という具合だ。そして、日頃の成果が試される大会本番には、筋肉を興奮させる赤い基調のユニフォームに、適度な弛緩を与えるベージュをアクセントに入れる。スパイクは、体の軽さを感じさせてくれる黄色と、色相によって黄色を際立たせる黒のストライプにする。それはまさに今年優勝した阪神タイガースの色ではないか。私達は虎のように強い、負けない戦う集団に生まれ変わる。

美術館で眺める著名な画家の作品だけが「美術」ではない。私が陸上部で経験したように、アートは額縁に入っていなくても私達の日常にさりげなく存在している。

私達は自分で意識しなくても、気付かないうちに多大な影響を与えられている。それは、決まったワクにおさまらない。自由で、楽しくて、心がウキウキするような存在だ。

アートは、400メートルトラックを跳びはね、踊りながら回ったり、ジグザグに進んだり、空に駆け上がったり、おさまることのできない生き物なのだ。

第1回高校生のためのアートライター大賞 最終選考会議 選考委員座談会

平成17年11月15日 筑波大学秋葉原キャンパス

出席者	穴澤秀隆	『美育文化』編集長(美育文化協会)
	今橋映子	東京大学大学院総合文化研究科 助教授
	押金純士	月刊『BT/美術手帖』編集長(美術出版社)
	藤本陽子	茨城県近代美術館 企画課長

司会 五十殿利治 筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術学専攻長

五十殿：大賞3点特別賞1点について、また特に、気になったものについて、大賞には足りなかったけど、これは良かったという文章があればご意見をおきかせください。最初の作品は、白崎藍さんの「心」。自分の作品、これを描くプロセスについて、自己主張を含めて自分史を折り重ねる。しかし、決して予定調和的に作品ができていくのではなく、そこに様々な屈曲が折り込まれた、なおかつそれを読ませる力、筆力というんでしょうか、そういうものを私は、指摘できると思うんです。いかがでしょうか。

穴澤：現代では情報が大きな価値になっていますよね。情報のやりとりは、当然に他者との間に起こることで、それを共有して活用することで、私達は豊かな人間関係を獲得できると考えているわけでしょう。でも、その一方で、情報に耳を閉ざして、個人のなかに没入していくことによって、初めて見えてくるものもある気がします。これは、ある意味でコミュニケーションを否定して孤独になることです。しかし、今の学校のなかで、孤独であることは、あまりいいことではないですよ。友だちを持つことが大事で、「仲良く」ということが、最大の価値規準になっています。そういうなかで、この「心」の筆者は、絵をかくという孤独な時間を豊かに生きることを知っている人だという気がします。

押金：今回、「心」以外にも作品を制作するうえでのきっかけとか、どうしてその作品を作るかということ

に関して書かれた文章が多く、非常に面白かったですね。個性というか、作品というのは、本当に、描いてらっしゃる作家のみなさんというように、意図せずして出来てくるところがある。ただ、それをもう一つ自分で考えたとき、単に、こういうものができました、ということだけではなくて、なぜそういうふうなことができたのかということ、どうして生活するかということも含まれるんですが、何故こういう作品を自分がつくったのかという分析をしていくことが、逆に、作品を支えるうえでの強度を持ちうると思います。

作家として今後、描いていくうえでは、自分で、プレゼンテーションにつながっていく鍛錬ということも含まれると思います。特にこの作品は、その中では、強いメッセージを放っていましたが、他のたとえば、大久保美貴さんの「作品と私」など、そういったところが、見ることができました。白崎さんの作品は、新しい発見があったり、自分の意図していないことが見えてきたことについて、より強い印象を与えるというところで、評価が高かったと思います。

今橋：具体的なところでいうと、「心」という作品のなかの、制作過程を語ることばに惹かれました。制作中にあらわれる形象は、意外にも自分が考えているものじゃなかったり、あるいは自分の感情をそれで高めつていくと、タッチが非常に激しくなってしまったとか、そういうところを非常に細かく描いているところです。何か読んでいて、こちらと一緒に緊迫感をもった部分があったということ。それから、自分の心というのは



(左から) 穴澤委員、今橋委員、五十殿委員

具体的にどんな感情かという、言葉になってしまうので、説明できるんだったら言葉にする、それができないものが絵になるんだということを言っている。それをまた言葉で書いているという、その複雑なことがとてもうまく表れていて、言葉と絵というメディアとしての違いが、ここまで問われていることが重要だと思います。

あともうひとつは、一番最後のところにその制作作品自体がでてくるんですけども、私は、「あっ、こういう絵だろうな」と思えたとか、なるほどなと思えたという着地点があったんです。つまりそれは彼女の書く努力が、いかに上手く実を結んだのかということが、最後に目撃できたということだと思います。

藤本：言葉にできないから、絵を描くんだという自己表現の方法を、彼女は主張しつつ、それを超えなければいけないところを、文章として表現し、なおかつ読ませる力があるというふう感じて、この作品にひかれました。

五十殿：ありがとうございました。続いて、田邊萌陶乃さんの「盲目の人々」ですが、これは写真家の素材自体が非常にユニークなものだと思いますが、その素材のユニークさにもたれかからないで、自分と作品の関係を書いている所が、いいのではないかというふうに思います。こういう重い主題は、確かに主題のほうに関心が傾きがちですが、バランスが非常にいいんじゃないか、自分の見方というものを出せているということなんじゃないかと思います。

押金：内容そのものが非常に重たいとか、視覚障害者に対しての意見であるとか、そういうところは確

かにあるんですけども、基本的には美術をどう見るかということになると思います。作品の中では美術の授業で話し合いをしながら、ストーリーを追っていくところがあって、さまざまな意見が出たり、筆者ともう一つ離れた視点での話し合いのなかで考察されている。非常に客観性というか、理路整然と書かれているという感じがしました、自分だけで見ているわけではなくて、他の人の視点も入っているという部分が非常に優れた点ではないかと思います。

五十殿：「私たち」という言葉が途中から出てるんですね。押金さんの指摘にそえば、最初、「私」といつてるんですが、途中で結構、「私たち」という言葉が出てくるという所がポイントだと思いますね。

押金：そうです。

五十殿：ひろがっているということですね。

穴澤：美術教育の目的の一つとして、「他者理解」ということがあります。これは単純に言えば、「だれもがすごい」ということの共感です。それは本来は、どの教科でもあるはずなのですが、認知的な教育の場面では見えにくくなっています。例えば、数学の能力がすごいというのは、多くの場合、その正確さやスピードに感心しているわけで、独創的な発想力が評価されているのではないと思います。これは目指していることが同じであるために、そうなりがちなわけです。でも美術の場合は、作品はどれもちがうので、隣の友だちの絵を見て、「お前スゴいな」と他者を評価することが、ごく自然にできます。

ところで、その他者理解という点で、とかく忘れられがちなのは、障害を持っている人のことですね。「盲目の人々」の筆者は、そういう人との理解を目指しているわけで、これは美術の世界をたいへん広く捉えていることだと思います。そういう認識が軽々とできているところに、この人のパーソナリティーを感じました。皆さんもおっしゃるように、全体の構成もしっかりしていて、文章力も評価できます。

今橋：ソフィ・カルを語るときの、フランス文学研究者を中心とした、一定の語り口っていうのがあるような気がするんですね。それに対して、今回は三宅光さ

んの「あの空を見上げれば...」とか、いくつも現代美術のものがあありますが、むしろ若者たちは構えることなく、現代美術に接しているということが、フランス文学における、一種気取った見方と対比してみると、とてもいいなと思うんです。現代美術が地続きに自分達の所にあるという部分で、その構えのなさというのが文章にしなやかさを与えていると思うんです。

「です・ます」調なんですよ。ね。「です・ます」だと、普通は押しつけがましいということになりかねない、難しいんですが、自然に何か、「です・ます」を選んで書いているという感じが好ましいです。あと、私達の見える世界だけが全てではなかったということに関しては、障害者と私達の連帯とか、一定の期待されるモラリティーというものとは、違うところで世界を新たに発見しているということが、この文章によく表れていると思います。

五十殿：藤本さんなにかつけ加えることがありますか。

藤本：そうですね、かつて「盲目の人々」を見たときの戸惑いにも似た感覚を思い出しながら読みました。視覚障害者の場合、右腕がない人が左腕で、聞こえない人が振動で、というのと違って、物理的に補完できない状況におかれているわけですよ。視覚障害者を被写体として提示するというこの重いテーマを、私自身は書けなかったり、踏み越えられなかったりするのですが、田邊さんは理路整然と書かれています。そこは素晴らしいとおもいます。ただ、私達の場合は、見える人達を相手にしているわけですので、まったく光のない世界にいる人達に、思いを致してしまうと、とても、やっぱり...

五十殿：美術館の現場だと余計...

藤本：現場にいと、やっぱりこれを見た時のショックは...。それをテーマとして出して書かせるという試みは、他者を思いやるという点では、最高のテーマかもしれないけれども、なかなか難しいなと思います。美術だけでは語れないという。

五十殿：有り難うございました。最後に、繁昌菜音さんの「見過ごしたものは何ですか」。これは、「足跡パフォーマンス」という、ある高校のバザーでのパフォー



(左から) 藤本委員、押金委員

マンスというものです。こういう芸術支援的なものについて、アートに関わることの喜びをテーマにした素直に、しかも歯切れのいい文章で、写真を的確に使って、説得力をもって展開しているように思います。子供も非常に楽しそうにやっているな、というのが伝わってきます。

藤本：確かに、先ほど補足説明を受けて納得したなという部分が文章の中にありました。文章に、実に生き生きとイベントというものが述べられていて、楽しく読んでいった時、突然、大きな転換があって、クリストの問題になっていて、なぜここで突然クリストへ行くんだという(笑)。こうした大きな転換がいきなりあり、それでいて最終的に、総括できたというところがあり、気持ちよく読ませていただきました。あえていえば、なぜここでクリストに行くのかな、という思いがあります。それとあと一つ、始めの一步、この一步の大切さというのを、もうちょっとまとめて欲しかったかなという感じがするのですが。

五十殿：「最初の私の苗」だから。

藤本：そうですね。種が落として何ができたという点で。社会性がある人として...

五十殿：確かに社会性に関わってくるという意味では何か理解する勉強が出来たかもしれません。押金さんいかがですか。

押金：臨場感、あるいは質感が、よく観察してあって、非常にレポートとして優れていると思いました。他にもこういった美術支援的なものであるとか、レポート

的なものももちろんあったですけども、実はもう少しそういったものが多いことを、応募作品の中から、優秀作品として期待していたのですが、少なかったのかなあという気がしています。

それと、やはりどこに焦点を最終的にもってくるか、予定調和的にならないような面白さを発見するということの難しさとか、取材することの大変さみたいなことですね、そういうことを思いながらも、この作品は全体としてレポートとして非常によくかけていると思います。

穴澤：学校教育で美術が他教科と際立っている点として、「作品」という「もの」を媒介とした教育だということがあります。理念や概念の肥大化が懸念される近代社会では、これはじつに魅力的な観点です。でもそのため、「作品を大事にしましょう」ということになり、作品の完成度が、子どもの創造力の評価に短絡される事態が起こって来ました。

そういう作品主義の弊害を批判する立場から、作品が尊いのではなくて、作るということ自体に意味があるという、つまり、行為とか時間とか、あるいはそのプロセスを重視する考えが、美術教育の理念としても台頭してきたわけです。このレポートの場合は明らかに後者であって、ここでは作品の「完成」ということは、ある意味で曖昧になっています。

パフォーマンスをどこで終わりにしたらいいのかは、やっている当人もじつはよく分からないと思うんですね。パフォーマンス自体が「作品」だと言うなら、その終了が「完成」になるわけでしょう。でも、この足型をどこかに展示するなら、それも「作品」になるわけだし、この人のように、その報告をレポートとして書けば、それがまた「作品」になってくる。つまり「どこまでが作品か」ということは、単純には決められないわけですね。そういうことの面白さも、このレポートにはあると思います。

五十殿：今橋さんにしめていただきましょう。

今橋：五十殿先生から、写真の使い方も評価の基軸にしていると、説明を受けてなるほどと思ったんです。こうやって見ていきますと、2つの写真が微妙に重なり合うようになっており、たいした編集能力ではないのですが(笑)、でも努力がいいかなと。そういうこと

に気がついてもう一度、このパフォーマンスを写真で見ると、実はそんなに人数がいるわけじゃないということが分かるんですね。パフォーマンスがあって人だかりができて、派手な行事になったものじゃなかったということは明らかに見てとれるんです。けれども文章とそれを比べて読んでみると、おそらく数少ないであろう参加者との交流というものを非常に大事にして、良く観察して、これを描こうしていることが分かるという意味で、作者の行為に対する誠実さということを感じました。

もう一つは、穴澤さんがおっしゃった、完成しないパフォーマンス、足ですけれども、土が温かいとか赤ちゃんの足が小さいとか、大事なことがきちんと発見されている。それは視覚のみを優先してきた美術のあり方を転換してきた、現代美術の一つの大きなテーマに自然に繋がっています。だからこそ、仕切りのない野外で準備を始めていると、広く思っていたキャンパスが小さく思えたというような、全くの日常が違うふうに見える。裸足でおりただけでも違った風に見えるという、人生におけるちょっとした発見のようなものが書かれていて、そういう点でも、好感が持てると思いました。

五十殿：ありがとうございました。以上、大賞については、それぞれ御意見を頂きました。では最後に、島田奈名子さんの「デザインはドーピング」です。これはやはり、最初、今橋さんに口火を切っていただいた方がよしいんじゃないかと思います。

今橋：先ず、私の趣味かもしれませんが、これはとてもいいと思いました。それは先ほど申し上げたように、主催者側が提示した三つのゆるやかな分野という提案を、良い意味で裏切ってくれたという面白さがあるということ。それからあと、最後のところがとてもいいと、言葉としていいと思いました。それは既成のアート概念を崩すとか、よくいわれるものではなく、アートが持っている過剰な部分、いろんな領域に広がっていくような、そういうものを、実感として捉えてくれた面白さだと思います。

それから、ハードルのエピソードも面白かったですね。高いハードルにもし花柄が描いてあれば、野原で遊ぶように飛べるのではないかと。運動選手ならではの感覚とか、そういうものが描いてあるとい

う意味で、私はこういう文章が、多分、大学生になったらもう出ないかなというような、新鮮さを持っていると思うんです。

五十殿：なるほど、高校生らしい。

今橋：はい。いい意味での高校生らしさがでてますね。普通に運動部に所属している人が、これだけ美術に興味を持っていてこうしているというきっかけがあり、この一つ企画を通じて私たちもこういう感性に出会えたということが、幸せだと思います。

五十殿：ありがとうございます。ほとんど言い尽くしてしまったという気がするんですけど(笑)。穴澤さんいかがですか。

穴澤：おそらく多くの人がそうだと思いますが、高校生になると、それぞれ、自分の得意分野がはっきりしてきて、野球をやる子は野球一筋、音楽が好きな人は、サウンドの世界にどっぷりという感じになってきますよね。そして美術が好きな人は、アートに深く分け入っていくことになります。これは本人にとっては自然なことかもしれませんが、文化のカテゴリーによって、世界がどんどん文節化されていく事態でもあるわけです。

この人の場合は、スポーツのスピード感で美術を受け止めているようなところがあり、それがみずみずしく感じられました。美術も音楽もスポーツも、教科として分立しているほどには、別個のものではなく、身体論的には相互に繋がっていることを、高校生らしい軽やかな感覚で捉えているところがいいですね。

藤本：私はまず、ドーピングという言葉が、この場合妥当かどうかということから始まったのですが、そういう次元のものでは無いと…。これは自分が推したものですけど、日ごろ美術とあまり係わりを持たない世界の間が、しかも、高校生だからこうなったと思うんですけども、自分のスポーツの世界に美術を持ち込んで、知っているありったけのものを書いたという、その強引さがかえって気持ちいい文章で、美術を知った楽しさが…。

五十殿：アートは楽しいってことですか。

藤本：そう。気がついた嬉しさで、夢中になって、あれもこれもと自分の世界に持ち込んで述べているというところで、この作品は、面白く読ませて頂きました。

押金：最初、この作品が美術的なのかどうか、ということを考えていたのです。実際に制作しているわけではないし、作品と何か関連しているわけではないんですけども、美術、あるいはデザインと、運動ですね、それが実は以外と近かったり、さっき穴澤さんもおっしゃいましたが、身体を動かしたりとか、その直感的な何かというところで、それこそ、幼稚園などでの「お絵書き」と「お遊戯」みたいなところで語られることもあるのですが、身体的なところという意味で、かなり直感的ですけども、なにかに気付いているというところが面白いと思いますね。文章全体の中にいろんなアイデアを持ち込んできているという点で、ちょっとかわったところがありますけども、面白かった。

五十殿：ちなみに、「体芸」といいまして(笑)。我が大学では建物まで「体芸」で、体育と芸術は並び称されています(笑)。これは、微妙な接点とすれ違いの文章なんです。アートとの接点とすれ違いは微妙で、接点を持つときに電流が流れているということが逆に分るんです。こういうときでないとなげられられないかもしれない。常識的なアートエッセイで判断すると、これは難しいかもしれない。でも、是非、特別賞を差上げたいという何かを持っていたという作品ですね。ありがとうございました。

それでは、もし大賞、特別賞以外で、応援しておきたいというものがあれば、もう少しで特別賞だったなというものがあれば、ご意見をお願いします。ずいぶんしぼってきってしまったので、何か一つを取りあげるというのは難しいのかもしれませんが、特に応援演説したいものが、あれば。今橋さんはなにかありますか。

今橋：菅千尋さんの「伝えること—人と人との繋がりを—」。紙芝居についてのものなんですけど、これは、「見過ごしたものは何ですか」と、非常に近いものがありました。この方の報告は、紙芝居をやってみただけ、決してみんながいい反応をしてくれるわけじゃない、というところの過程ですね。つらい過程が非常によく

書かれていて、それが最後、子供の一言で、自分がとても救われたという気持ちのところ、何か他人事ではなく読んでしまいました。教育現場にいると(笑)。

五十殿：救われる部分がある(笑)。

今橋：はい。いつでもみんなが感心して聞いてくれるわけでもないし、いろんな過程があるわけですけど、自分よりも若い世代の一言が、自分の努力をどこかで救ってくれる。そういうことが非常に爽やかな形で書かれているという意味で、私は好論だと思いました。

穴澤：三宅光さんの「あの空を見上げれば…」ですが、若いというのはおそらく、とりとめのないことだと思うんですよね。将来の見通しをしっかりとっているなんて、なんだかズルイ。本人もどうなるか分からないというような不安の中にこそ、切実な感覚があるはず。それに対して、まとめることは、いくらでも上手になります。編集なんてまさしくそうです。手持ちのものをいかに、ていよくまとめて分かりやすく提示するかという能力ばかりが身につっちゃう(笑)。

ですから若い人に「よくまとまっていますね」というのは、褒め言葉としては使いたくないんです。そういう意味で「あの空を見上げれば…」は、たしかに未整理な部分は目に付きますが、それは欠点ではなく、爽やかで新鮮な印象を受けました。

押金：全体として非常に面白く読ませて頂きました。高校生の文章ということで、やはり新鮮だったということがありました。全体として非常に楽しむことができました。その中でも特に大久保美貴さんの「作品と私」とか、あるいは日角有希さんの「『モナ・リザ』と私」とか、そのあたりも、非常にそれぞれ作品と私の関係を上手く伝えていたり、『モナ・リザ』と私がどういうふうに出会ったか、文章としても非常に読ませるというところで、評価したいなと思います。全体として非常にレベルが高かったのではないかなと思います。

五十殿：ありがとうございます。将来的にBTに載りそうな人は出ますかね(笑)。是非(笑)。

全員：(笑)。

藤本：「『モナ・リザ』と私」は、一作品に対する思いが素直に綴られておりまして、その思いというものの今後を、知りたいという私の思いがございまして、今回賞を設けた狙いの一つでもあるのでしょけれど、やっぱり一つの目標があるということと、指導者がいるということは、今後、大いに美術にとって必要なことだなと思いました。

五十殿：頼もしいことですね。

藤本：当初は、国語力の問題になるのではないかという、危惧のようなものを抱いておりましたが、総社南高校でも、国語ではなく美術の時間にやったということ、あと「盲目の人々」にしても、能力・表現力の豊かさというものがすごく伝わってまいりますし、素直な感想を述べられているので。今回のようないい機会を頂きましたことを感謝しております。是非、今後も…。

五十殿：続けたいと思いますが、なかなかこれが…(笑)。

藤本：私達は制作の側で、文章よりも、作ることを。そして極力、理詰めでの説明じゃないほうでいきたいと思っていたのですが、今回のことで、見て感じたことと、それを文章化することというのが、必ずしも遠い関係ではないのだなと。

五十殿：私はもうあまり言うことはないんですが、総社南高校のお2人は確かにすごいなと思いました。札幌平岸南高校の人達もがんばってたんですけど、ちょっと残念でしたね。学年の違っていて大きいのでしょうか。平岸高校は先生が熱心に指導して下さったのかも知れませんね。私は『モナ・リザ』、おしゃれだなと思ってました。やっぱり、最後は筆力なのかなと思います。上手く書くのではなくて、説得力をもって書くということ。頑張っていた。感謝で一杯です。御協力有り難うございました。